

前日、農林事務所検査が押し岐阜を発ったのが16時前、松本までは高山安房峠経由でオーネット・コールマン聴きつつ200km程車を走らせた。エオンタでコーヒーを飲む余裕もなく松本市内で渋滞に巻かれて新居のyoneyama氏宅が20時過ぎ、痛風対策にとプリン体セーブの野菜モリモリ食を頂いてソニー・クラークを子守唄に涼やかに就寝した。

7/15【晴】 四時半起床、オムスビ握って6時前には発って市内より常念を眺めるとその左手にピョコンと槍の穂先が見えた。うむむ、播隆ならずともあのトンガリは見逃しまい。一度、三股の登山口に行ってしまったのはご愛嬌で、仕切り直して一ノ沢登山道から常念乗越を目指す。沢に準じた登山道で好ましい、酷暑の季節には涼やかで重宝もされよう。ヒョッコリ踊り出た常念乗越からは唐突に大きさを増した槍の穂先が目に入った。計画では明日にもあの穂先に立っているはずだ。この①常念乗越からは②2269 鞍部、通称「中山峠」も明朝予定の③赤沢山北鞍部も視認でき、それら登路も確認しておいた。③については雪のルンゼ部分あって yone 氏は顔を顰めた。常念小屋からかつての登山道である一ノ俣谷へ踏み込む。ハンプトン取水ホースが標高2300まで下っていることもあって、踏跡もある。東天井岳からの沢を確認して②「中山峠」への小沢を当てに掛かるも判然としない。朝の一件もあって過剰な読図が却って仇となり、当て損なって中山2492.1の北東沢に入り込んでしまい、余分のノッコンをする羽目となったがまあ越えれりゃいいんだ。ただ「ここを深田久弥も通ったんだあ」との感慨には耽損なった。磁石を北西に切ってハイマツ漕いでガレガレ沢をイジこく下降し、15年振りの二ノ俣谷に入り込んだ。広い本流出合で大らかに火を焚いた。

7/16【曇夜雨】 スパ食って大きな沢を下降、今度も念入りに出合を確認した上で③赤沢山北鞍部に突き上げるルンゼ状の濁沢を選択する。この出合には紫のハクサンチドリが一輪健気に咲いており、私の野生ラン写真コレクションにまた一つ加算された。左に回り込んだ先に行く先がシュパッと見通せた。雪溪が出た辺りでピッケルならぬ杖を鋸で拵えて登高の補助とした。効果テキメンでツツカと登高ハカドリ風吹く鞍部へ導かれた。その際には槍の穂先が見えていたものの、踏跡辿った先の赤沢山では穂高に始まる一万尺ラインが雲の中に隠された。日本百高山マニアには必須の赤沢山も、我々には一つの通過点でしかない。鞍部へ戻りしなに一人の登山者とすれ違った。さて、当初計画ではここから西岳に登って東鎌尾根経由で槍ヶ岳を目指すのだったがガスに烟る視界のない山頂に立って何の意味がある、ということでそんなアタックは放棄して、今居る鞍部からトットと登山道へ下降することとし「鞍部乗越三題」と成す。「おう、そうするか」こんな計画変更気安く同調してくれる同行 yone 氏に感謝だ。クマがうろついていそうなサンカヨウやミヤマチョウジザクラ咲くこの西沢は、赤沢山の岩壁登攀後の下降路でもあるという。A氏が何時か登ってみたいと言っていた滝が槍沢対岸に見えた。水湧く「大曲」から「一ノ俣」を目指す古道途上には、芥川龍之介も泊まったであろう赤沢岩小屋があり、赤沢山の岩壁群を見上げるポイントもある。近年見向きもされない壁と思われるが、冬季剣沢大滝で名を馳せた丸山隆司氏や加藤保男氏の名前も初登録には見出だせる。二ノ俣谷の橋を過ぎ直に現れる一ノ俣出合もそれは立派な支流である。中国語を操る一団が去った後、かつて登山道が通っていたというその一ノ俣谷へ入渓する。ここまでの行程で yoneyama さんが珍しく辛そうな素振りを見せる、適地あらばすぐにでも泊まりたい場面である。とはいえこの谷の核心部はこれからの下部にあり、名を成す滝群にそれは現れている。その核心始まりの「二段ノ滝」は名に偽りありの三段15m滝で、左手を登れそうだったが上段奥のツルツルに手が出ず左岸の踏まれた捲道を辿る。「七段ノ滝」は七段ではなくそれ位に連段する滝の意で、クキクキと曲がった一群の滝として中々に見応えがある。左岸岩壁の高捲道に掘られたような形状部があり楽しい。途中横断で下降が可能なルンゼがあったが、右曲部連瀑帯はロープを出せば右岸が通過可能なので(鉄杭あり)これを降りる手もある。手の出ない「一ノ俣の滝」8m直瀑のこれまた左岸を捲くと「山田ノ滝」手前の谷が北を向く屈折点で、時間は早いが右岸の平地を見つけて泊とした。景気良く火を焚いて酔っ払う。夜半結構な雨が降って、増水時の翌朝のルートの気を揉んでウ

トウトとした。

7/18【曇後晴】 意外にも沢は増水せず。ここは森の保水力のお陰としておこう。歩き出してじき、左岸に「山田ノ滝」が流下する。支沢にして中々の滝であるこの名称は、深田久弥の書にも登場する常念小屋の主の苗字から採られていると思われる。その後、左手にテーブル状岩があったり右手には剥離した今しも倒れそうな壁状の岩が立ったりと飽きず、構成美のある二条滝の向こうにはゴロ滝を従えて右手より「常念ノ滝」が落下する様が見える。『その念仏にも聞こえる落下音は何となく 或るシムボルでもあるような気がした』集水範囲の狭い割にこの立派さだ、常念岳西面の湧水沢と思われる。この滝の分岐を潮に、これまで旺盛だった水量も減じて溪相も穏やかに転じる。古人がこの谷の弱点を見越して常念乗越から中山峠を経由したのも頷ける。しかし件の中山峠への登路沢の正答がどれなのかは、帰路の答え合わせにしても判然としなかった。もうこうなると、本流の微妙な方角の変化から判断するのみだが、よもやGPSを持ち込んで判断する愚は避けたいところである。いや、今の時代はソレだろうが、だとしたらいやはや何とも嘆かわしい。

遡行対象としての一ノ俣谷、かつては小黒部、不帰ノ谷とも呼ばれたという。水量豊かで快活で、花崗岩主体の清潔な溪谷遡行が楽しめる。Yoneyamaさんはゴム底のよくある地下足袋で歩き通せた程にフリクションが極めてヨロシイ。下半部の連瀑は見応えもあってもっともっと歩かれて良い溪である。ただ宿泊適地が少なく、4人パーティーだとその選択に苦慮しそうだ。下半部に水量豊富な穿った滝場があって、源頭部にさしたるアトラクションもなく穏やかな沢というのは私の好みなのだが、これなど久々のヒット沢だった。あとは往路にも辿った路を返し、常念乗越より391mの高差を喘登して常念岳へ。沢を登って名峰へ、ここに整いました。

一ノ沢の下りでは、明日のダメージが解っていないながら駆け下らざるを得ない心情が有った。未だまだ登りたい。だからこそ身体を労るでなく、虐めたくなる。こんな心を、伝えなくとも解ってくれる同志と山行を共に出来、有り難いことである。

結果、本山行では29km歩いた。

豊科駅にyoneyama氏を送り、高速道へ。駒ヶ根で雷雨に掴まりそれを抜ける頃、今回の山行を祝福するかのように左手に虹が出た。岐阜着20時、子供らが迎えてくれた。

計画の段では体調不良だの虫歯だの直前に発覚の痛風だのと不安要素もあり、神経質になって家族に迷惑も掛けただけ、何とかかんとか行って帰ってこられたことが何より嬉しい。槍ヶ岳アタックを排除したのは正しい判断だった。2, 30代の体力見積もりで計画してはいけない。来春にこそ、その清き頂きを再度目指したい。

人生の折り返しを迎え、自らの希望が何でもかでも叶う歳でもなくなった。母を無くした今となっては生き急ぐ訳でもないけれど、やるべき事よりもやりたい事を確実に塗って行きたい、いや生きたい。そんな中で他人のお仕着せではない、自らが描いた想像の絵の中で山行をものすることが未だ叶う幸運を思った。今、身体はガタボロだが心は満たされている。

## 【タイム】

7/14 ; 会社発(1545)氏宅着(2015)

7/15 ; 発(540)P(640)三股(710)P(720)/ P(815) 一ノ沢登山口(840)常念乗越(1130-1200)一ノ俣谷標高2190(1250-1300)中山峠乗越沢出合(1340-1400)中山の北尾根上(1520)二ノ俣谷標高1890(1630)

7/16 ; 発(530)赤沢山鞍部沢出合(600)赤沢山北鞍部(835/930-1000)赤沢山(900)大曲(1100)一ノ俣谷出合(1215)一ノ俣谷標高1910(1415)

7/17 ; 発(615)常念ノ滝(700) 中山峠乗越沢出合(735-800) 一ノ俣谷標高(835) 常念乗越(955/1145-1215) 常念岳(1055-1115)一ノ沢登山口(1420)P(1435)